大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『言語と文化』廃刊の辞：或る紀要中毒者の告白

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学 公開日: 2024-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000660

『言語と文化』廃刊の辞 ―或る紀要中毒者の告白―

大平　桂一

「紀要論文の読者は1.5人しかいない、一人は作者本人、もう一人は査読者。査読者はまともに読まないから0.5人に数える。」というのは誰の言葉だっただろうか。うろ覚えなので思い出せない。きっといろいろなバリエーションがあるのだろう。自分に限って言えば、この言葉は殆んど当てはまらない。在職中、学内の紀要が支援室のボックスに入っていると、帰りの電車ですべての論文を斜め読みする習慣を持つ紀要中毒者の自分には、「紀要論文の読者は1.5人しかいない」という言葉ほどナンセンスなものはない。『言語と文化』の第22号を開くと、台湾の小学校における英語教育、ソ連におけるバレエ「白鳥の湖」上演の変遷と日本への影響[1]、幼児の日本語・朝鮮語のバイリンガルへの成長過程、「日本事情A」の実践報告などが並んでいる。斜め読みしてこれだけの知見が得られる機会は他にはないであろう。「日本事情A」の実践報告[2]は、（昔では考えられないが）この授業では留学生と日本人学生が一緒に授業を受けて、講義のほかに共通の話題、例えば「やさしい日本語」（basic Englishのようなもの？）について討論し、実際に「やさしい日本語」で文章を作ってみるところまでやる、という驚くべき内容であった。

学内の他の紀要でも同じことは起こる。電車の中で読んだ『大阪府立大学紀要』掲載の論文で印象に残ったのは、明末の北方国境地帯における明帝国の諜報活動についての文章、やはり明末に国境地帯から北京までどのように情報が伝えられるかという問題について論じた文章で、派手さのない論文ではあるが、自分の明帝国像に根本的な変化が起こったことを告白する。

また『人文学論集』には、美学、中国医学、ドイツ文化史などの文章が綺羅星のように並んでおり、その中には他の紀要では絶対に目にすることのできないであろう、「痧」という病の概念が各時代でどう変遷したかを論じた独創的な論文の翻訳が掲載されていた。この『人文学論集』という紀要の多様性はおそらく他に類例がないのではないだろうか。

ところが最近紀要の受取拒否を表明する大学が増えてきた。所蔵のスペースが足りなくなってきたというのが表向きの理由だが、自分は、それは本当の理由ではないと考える。大学教員が自分の専門以外の分野を渉猟する時間を失ったことが真の原因ではないだろうか。私は在職中、公立大学中百舌鳥キャンパスA-15棟４階の言語文化資料室にお邪魔し、そこに架蔵されている、数多くの大学から寄贈された膨大な数の

紀要を漁(あさ)るのを常とした。そこには日本近代文学、英語学、宗教学、歴史学および哲学など、ありとあらゆる分野の論文が含まれており、どれだけたくさんの論文の材料が手に入ったか枚挙に遑がない。ターゲットをしぼって検索し[3]、そこから得られる成果も大であろうが、紀要をパラパラめくって、これまで想像もしなかった分野の研究論文を読んで得られる成果も大きいと自分は考える。

『言語と文化』が廃刊され、他の紀要と合併された後も、多様性を失わず、紙媒体として生き残り、私のような紀要中毒者の手にとってもらえますように、ひたすらお祈りするのみである。

注

1　小さい頃から目や耳に馴染んだ松山バレエ団が、ソ連邦における「白鳥の湖」上演の影響をどう受けたか、という話題が出てきて、とても懐かしかった。

2　授業の実践報告！？と思う人がいるかもしれないが、これがなかなか面白いのである。英語の授業、初年次ゼミの授業などの実践記録は、在職中非常に参考になったことを記しておく。

3　今ならperplexity AIなどを使って検索するのだろうか。